

和音の本音

KAZUNE SHIMIZU - TRUE NOTES

#3

「いや、両想いは目ざせないから。」

生死を超えた

コミュニケーション

古いレコードを聴き終えて、じつくりとした時間を生きてきた後に、ふと気づく。ああ、この人はもういないんだ、コンサートで実演を聴くことは決して叶わないのだ、と。

たとえばいま、ウィリアム・カベルの弾くシヨパンを聴いて、私はそんなふうにも思った。カベルを生で聴けたらどんな音がしたのだろう、と60年以上の録音の前に思いを馳せたけれど、不思議なことに、シヨパンにはもう会えないのだ、と切迫した思いに駆られはしない。どうしてだろうか？ 時代が遠いというだけの話ではなく、シヨパンはきつとまだ存在しているだろう。

楽譜を開くたび、ピアノの鍵盤に手を置いた瞬間、作曲家との対話はくり返される。クラシックのピアニストは大半の時間、作品の解釈と表現を通じて、死んだ作曲家とのコミュニケーションに向き合う。なかには、作品はテクニクだから作者そのものとは関係がない、と言いつつピアニストもいる。しかし、私たちが聴き手として心底感じたい音楽は、きつ

と清水和音が言うように、どこまでいても人間どうしの対話に尽きるのではないか。

清水和音は、家族や友人との時間を大切にするとし、もちろん作曲家とのつき合いをこよなく大事にしている。いまは死者でも、かつて生きていた人間であることに変わりない。清水和音の演奏を聴くとき、私がつまずく感じるのは作曲家との生きた対話へ献身するひたむきさだ。生者であれ死者であれ、音楽の時間のなかでは、みんなひとつの心に向かう。

因果なもので、死者との対話を生業とする彼自身は、どんなふうと考えてきたのだろうか？

自分以外の人間との間に なにを見出せるか。

「ああ、それは、無責任に音楽のファンとして、ベートーヴェンを聴きたい心はいつだってある。でも、弾きたいと思う心は、いつだってはないわけだ(笑)。ベートーヴェンに向かうには、エネルギーが必要だよ。だから、自分に元気がないときは、あの音楽はうるさくてだめだよ。自分が満ち溢れているときに対峙しないと、いい人間に思えない(笑)。ペー

トーヴェンをいい人間だと受け入れられない。だから、自分がさうとう精神的に強いときじゃないと、ベートーヴェンを弾くのは無理だね。ただただ、うつつうしい人間に感じられるだけだよ。」

生きる力や意志、もつと言えば生き物としてのエネルギーが強くないと向き合えない相手である。聴き手としてもそう感じるくらいだから、ピアニストは格段にたいへんなはずだ。

「あくまで、作曲家とのコミュニケーションがスタートだから。相手が死んでいったって、コミュニケーション能力にかかってくるよ。」

音楽家のなかでも、コンチェルトとか室内楽とか一緒にやるのが極端に苦手な人がいると、『ソロしかできないんだよね』ってみんな言うわけですよ、あまり褒め言葉じゃなくて。個性だとかって多くの人が口にするけれど、個性なんてあるに決まっているわけで、そこからどうやっていくか、自分以外の人間との間になにを見出せるかという話だから。

作曲家との間も同じで、結局は、人とのコミュニケーション能力が欠けている

清水和音さんの本音トークも第3回めに。第一線で活躍する演奏家が、多岐にわたって、忌憚なく語る「本音」に毎回惹きつけられます。読者の皆様からの様々な質問にもお答え頂きますので、どしどしご質問をお寄せください。今回のテーマは「両想い」。それは演奏家、作曲家などとの広い見地にわたります。

ききて・文=青澤隆明
Text=Takaakira Aosawa